

武蔵野日曜集会

霊肉渾然 (二)

——ヨハネ伝第6章41～71節——

1984年6月17日 (武蔵野)

小池辰雄

「ロマ書の序文」 渾然融合一如 神さまに我々は呼び出された 話を聞きっぱなしではダメ
信知渾然

【ヨハネ6・41～71】

41ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いにしにより、⁴² 呟^{やう}きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降り」と言うか』⁴³ イエス答えて言い給う『なんじら呟^{やう}き合うな、⁴⁴ 我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦^{よみがえ}えらすべし。⁴⁵ 預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。⁴⁶ これは父を見し者ありとにあらざ、ただ神よりの者のみ父を見たり。⁴⁷ 誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。⁴⁸ 我は生命のパンなり。⁴⁹ 汝らの先祖は荒野にてマナを食いしが死にたり。⁵⁰ 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。⁵¹ 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』⁵² ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³ イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴ わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦^{よみがえ}えらすべし。⁵⁵ それわが肉は真^{まこと}の食物、わが血は真^{まこと}の飲物なり。⁵⁶ わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷ 活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。⁵⁸ 天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらざ、此のパンを食うものは永遠に活きん』⁵⁹ 此等のことはイエス、カペナウムにて教うるとき、会堂にて言い給いしなり。

⁶⁰ 弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚^{はなは}だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』⁶¹ イエス弟子たちの之に就きて呟^{やう}くを自ら知りて言い



給う『このことは汝らを躓かするか。』⁶²さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。⁶³活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。⁶⁴されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり『イエス初より信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。』⁶⁵斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ずと言いしなり』

⁶⁶ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩まざりき。⁶⁷イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』⁶⁸シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。⁶⁹又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』⁷⁰イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』⁷¹イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

●「ロマ書の序文」

ヨハネ伝6章29節の、

「²⁹イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり』と。こういう言葉ははつきりと肝に銘じてください。」

「信仰とは神業である」

ということ。逆に言って、

「信ずるとは神の業である」

と、述語と主語とを逆にしてみていいわけです。信仰は神の業であるということは、第七卷『聖書の人ルター』のマルチン・ルターの「ロマ書の序文」のところに私は書いたでしよ。275頁の「信仰」のところを読むと、

「信仰は人間的な妄想や夢想ではない。ある人々はそんなものを信仰と誤っているが。そして彼らが、信仰に従って何ら生活の改善も善き行為も伴って来ないのに、なお信仰について多くを聞きまた語り得るのを見ると、彼らは誤謬に陥り、信仰では充分でなく、義とされ、祝福されるためには行為もなされねばならないと思うのである。その結果、彼らが福音を聞くと、性急にふるまい、性来の諸能力からある考えを心の中に作り、こう言つのである「私は信じている」と。それを彼らは義しい信仰と思い込んでゐる。けれどもそんな考えは人間的な想いつきであり観念であつて、決して心のどん底にまで透徹しないものであるから、そのような信仰は何らなすところなく、それにつづいて何ら改善も起きて来ないのである。」

ところが(まことの)信仰は我々の中に於ける神の行為であつて、この行為は我々を



変革し、新たに神から生まれしめる。それはヨハネ福音書一・二三にあるように。そして旧きアダム「性来の我れ」を殺し、我々を心に於て、情緒に於て、思惟に於て、またあらゆる能力に於て全く別人にする、しかも聖霊を自分と共に齎すものである。噫、信仰とは何と生き生きとした能動的な、活動的な、有力なことがらではないか。であるので間断なく善きことを実現しないではいけないのである。信仰は善き行為がなされ得るか否かを問わない。そんな問いを發しないうちに信仰は善き行為をなしてしまっている。そして絶えず行動している。だがそのような行為をしない者は、信仰なき人である。彼は信仰や善き行為を求めて身辺をまさぐり、見まわり、しかも信仰や善き行為が何であるかがわからないのに、信仰や善き行為に就て多くの言を口やかましく語るのである。云々」

なんて書いてある。

私が言っている、絶、信、の、信の世界、信、行、一、如の世界です。もちろん、我々はそれをきたすことがしばしばありますけれども。それをきたしていても、それを苦にすることはない。問題は、

「その行為が信から本当に発しているか。それがどんなオンボロな行為であつても、自分でつくつたような行為でない」

ということが大事なんです。そして、

「信仰それ自身が、信それ自身が一番内的な行為である」

ということ。内的にして全的な行為。全存在的なもの。決してただ頭ではない。もちろん、ただ心でもない。全存在的。そして、その信仰の行為のひとつの表れは祈りなんです。信仰、祈と言つてもいい。それがキリストの中に信入し祈入すること。だから、力が来るんです。これを体験するまでは観念だ。

しかも相手はキリストです。神さまではない。キリストです。「神、神」なんて言っていたら、いつまでたつても始まらない。相手は、神の信そのものである——これは信の権化なんだよ、神の信の権化であり、愛の権化であり、義の権化であり、光の権化であり、生命の権化である——そういうキリストの中に祈入信入するところに、信の世界がある。だから、そのキリストの信を賜るだけのなし、キリストの愛を賜るだけのなし、キリストの義を賜るだけのなしです。みんなそうです。何ということはない。キリストの生命を賜るだけです。

●渾然融合一如

「我を食べ、我を飲め」

と。凄いことを言っているからね、

「我が肉を食らい、我が血を飲む者は永遠の生命を得る」



と。「何てひどいことを言うか」とユダヤ人が言っているわけだ。キリストの次元がわからないものだから。キリストの肉は霊肉なんだ、もう肉それ自身が。具体的にキリストを食らい、キリストの血を飲むとかいうような——要するに最後の晩餐だ——最後の晩餐的に、

「これは我が血なり、我が肉なり」

とキリストが言って、パンを裂き——「裂き」と書いてある——葡萄酒を飲ませた。非常に具体的なんだね、キリストの福音の世界は。

渾然融合、一如。こういう境地が本当の信の境地なんです。だから、キリストが、

「私そのものが本当に食われていなければ。生命だから」

と。けれども、その内容は、

「わが言は霊なり、生命なり」

ということ。そのことはあとの方でキリストが説明していらつしやる。具体的にキリストと交わっていたヨハネやペテロやヤコブは、地上でもって本当はキリストを受けとらなければいけなかったんだよ。しかし、みんな受けそこなった。十字架を通ってないから、仕方がないけれども。それでキリストにみんな躓いて、

「汝らも去らんとするか」

というわけだよ。

「お前たちはみんな私を棄てるだろう」

と。あとから、受けそこないを思い出して、本当にキリストの中に入ったでしょう。

本ものは最後には勝ちますから。生きた真理というものは必ず勝つ。そのことはもう、キリストに在れば、我々が本当にエン・クリストの現実になれば、何の証明もいらぬ。それ自身が自ら証明する。

この6章で言っていることは、五千人の人にパンを与えた大奇蹟が起きた。そうすると、そのパンをもらったことをただ喜んで、その現象にとらわれているから、

「お前たちは本当の徴を見ていない」

とキリストが言われた。神の徴そのものであるキリストを見ていない。

「私が本当は見えていない」

と。その徴そのものであるキリストは

「言い逆らしいの徴」

です。「言い逆らしいの徴」そのものであるキリストを本当に体受する。私は信受とは言いにくい。体です。霊肉渾然なんだ。

「わが肉を食らえ、わが血を飲め」

という、それを体^{からだ}で受けとる。

「キリストという体を体で受けとれ」

というわけだ。体受です。これが本当に「知る」という世界なんだ。これが本当に「信ずる」



ということ。信と知は一つなんです、この福音の世界では。ホゼアが言っているあの「知る」という世界です。

「汝知り給う」

という詩篇139篇の「知る」なんです。体でわかっている。ところが、頭で分かつうとして、一生懸命でどうだこうだと聞く人があるんだよな。

「そういう聞き方では、いくら説明してもダメだからよしませう」

と私は言う。角度が違うから。

「それよりも、キリストというドラマの中に入ってください」

ということだ。

この場合の「肉」というのは、いわゆるパウロが言っている自己中心の「肉」ではないですよ。具体的存在としての実体を「肉」と言っている。「受肉」の「肉」です。

「ロゴス・キリストがサルクス、肉となった」

というのはその「肉」のことです。霊界のキリストと地上のキリストが渾然としているということだ、霊肉渾然というものは。そして、私たちが具体的に救われるのは、やはり霊肉渾然として復活体に救われ、霊体に救われることでしょ。霊体だから。

キリストと教会の関係を夫と妻の関係として、パウロが説いているのがそのことなんです。みな一如の世界だという。それから、我々兄弟姉妹がみなこの一如の世界です。霊的な霊肉渾然たる連なりの世界です。

●神さまに我々は呼び出された

けれども、弟子たちはこのキリストが本当につかめないものだから。

⁶⁵斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我

に来るを得ずと言いしなり』

「父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ず」

という。弟子たちは

「それではダメだ」

と言って、だんだん去って行つた。本当は、ダメだと思ふことがダメなんだ。

予定説と言うのは難しい。私は予定説なんて言いたくない。「プレデスナツイオン」という。カルビンが言つたけれども。

「我哀れまんとするものを哀れみ、頑かたくなにせんとするものを頑かたくにする」

なんていう言は躓きになるよ。神さまはそんなことをするのかと。客観的に

「あの人は選ばれている、選ばれていない」

ということは絶対に言えないんです、客観的には、対象的には。自分でダメだと、神さまに選ばれていないと思う人は、自分で自分を審みているだけのものはなしで、自分で予定説を



つくっているだけのなしだ。神さまの方は、万人を救済しようとしている。予定説ではない。ところが、予定説は予定を自分でつくっている。

それをキリストがこういう言い方をなさるものだから正直蹟いた。これはちよつと説明できない。全世界の人が本当に現実にキリストを信ずれば問題ないけれども、そうはいかないでしょ。非常に少ない。しかも、いくら説いても反発する人がある。また、非常に求めているのにこの福音にでつくわさない人がある。何といいますが、これは全く不可解です。とにかく、救われた人は選ばれた人ですから。何だか知らん。価値はこっちにあるのではない。何か知らんが、神さまに我々は呼び出された。それはみんな責任と使命があるんです。他の人を救う、他の人をキリストに持つていく責任と使命の事態は何かというと、これは愛なんです。それを実行しないと、選ばれて救われたと思ったが、

「どっこい待てー!」

ということになる。神さまは、キリストは、天界に連れて行くかどうか知らんですよ。その人の生涯が終わる瞬間まで、その人は天国にゆくか、地獄にゆくか、煉獄にゆくか、これは誰も分からん。

「あの野郎は当然地獄へ行く」

なんて思ったのが、どっこい天国に行くかも知れない。

「あれはもう天国へ行く」

と思ったのに、どっこいそうはいかんということもあるだろうし。その審判は神・キリストだけがなさる。ただ、主観ではなくして、本当に十字架の贖いを受けとり、本当に御霊にあずかって、とにかく知らんが、前進また前進しているような人を神さまは地獄には落とさない。そして、それが同時に、何とかして人を救いたいとやっている人です。

「俺だけは……」

なんていうのはちよつと困るよ、それはエゴイズムだから。

だから、すべてのキリスト者は祭司であり伝道者である。「万人祭司」という。どのクリスチャンも祭司であるということは、執り成しをしなくてはいかん。また、人を救う道そこに拓いていく。いかなる場合にでも、この福音のために、たとえ謗^そられようが、迫害されようが、ということ。いよいよもつて、そういうことに遭えば遭うほど逆に力強くそれが展開していくような魂です。それは聖霊がなす。御霊がいかに大事かというのはそのわけです。

●話を聞きっぱなしではダメ

あなた方は私の話を聞きっぱなしでは、とてもダメなんだ。本当にそういうふうに日常生活で活動していなければ。私は藤井先生のところにいたときにちつとも活動しなかったね、聞きっぱなしで。先生が逝^はつてしまつてから活動した。あなた方も、



「小池先生が向こう側に逝ったらやりますよ」

なんて（笑）。今から、高をくくつてはダメだよ。大いにやってください。なかなか向こうへ往かないからね、僕は。まだまだ仕事があるから。モーセは8歳のときに出エジプトしたんだよ。ちょうど私の年配だ。そして、あと40年間——120歳でピサガの頂きで天界に往くまで40年——第二の還暦をモーセは迎えたわけです。私もモーセみたいにやるかもしれない。それはもう使命がありますから。

67 イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』

「なんじらも去らんとするか」を直訳すると、

「汝らも去らんとするのではないか」

という、「メイ」という否定詞が入っているんです、ギリシア語では。ヘブライ語でキリストが果たしてどう仰ったかは別問題ですけども。

「お前たちも、もう去ろうとするのじゃないかね。しょうがないね。まあ去つても

いいよ。そのうちに集めてやるから」

と、キリストはそこまで仰らないけれども、ちゃんとその先は見えている。

「今に後悔して、また戻ってくるよ」

と。人間はすべて可能性を持っていますから、現にその人がこうだと言って、決して人をそこでもって判断しきるようなことをしてはいけません。どこまでもその人の未来を明るい気持で見えて交わっていくことが大事です。

「性格が運命をつくる」

という言葉があるけれども、そういうところがありますよね。

「太陽の如くあれ」

というのがそのことだ。嵐が吹こうが太陽はその上から照っているというわけです。ジェット機に乗ると分かる。どんなに雲があつても、ジェット機は雲の上に行ってしまうものね。そうすると、サーッと明るい空だから。

● 信知渾然

ゲーテの『ファウスト』第一部の1210行のところから、ちょっとご参考に言っておきます。

「だが、ああ、おれは心から望んでいるのに、

満足の感じがもはや胸から湧いてきそつにもない。

最善の意志をもつてしても満足が出てこない、どうにもならないわけです。

けれどもどうして平安の流れがこも早く涸渇し、

われわれがまた渴きに苦しまねばならぬものか。

人間は結局、自分がいくら最善の意志をもつてやろうとしてもどうにもならん、満足が出てこない。



それはおれのたびたび経験してきたことだ。
しかしこの欠陥はおぎなうことができる。

われわれは超地上的なものを尊重することを選び、

また天の啓示に憧れるが、その啓示は、

黙示録の「黙示」は啓示という字ですからね。神の啓示です。

新約聖書に示されているもののほど、

貴く美しく輝いているものは外にはない。

ゲーテがいかに新約聖書を本当に体で読んでいたかがわかる。私はこのところが大好きです。

あの原典をひもといて、

誠実な気持でひとつ、

神聖な原文を

好きなドイツ語に訳してみたくなった。

こう書いてある、「太初に言葉ありき。」

もうここでわれはつかえる。誰かおれを助けて先へ進ませてくれぬか。

言葉というものを、おれはそう高く尊重することはできぬ。

……

こう書いてみる、「太初に意味ありき。」

……

こう書いてあるべきだ、「太初に力ありき。」

……

霊の助けた。おれは咄嗟に思いついて、

確信をもってこう書く、「太初に業ありき。」(岩波文庫『ファウスト』相良守峯訳)

全く、ゲーテの『ファウスト』にはかなわんよな。最後に、

「太初に行為あり」

という。即ち、私に言わせれば、

「行為は始めでありまた終りである。終りにもまた行為である」

と。行為がものをいうんです。神さまは出エジプトという行為をした。これが恵みの行為。

恵みとはそのような業である。プロテスタントは

「信仰、信仰」

と言っているけれども、

「本当の行為は信仰と一つだ」

ということを徹底的に我々は自覚して進んでいかなくてはダメです。内的な行為が口に表れれば言葉となり、手足に表れれば行為となる。言行一如なんです。言も行も内的な信と



いうところから発する。信が本ものならば、必ずこれは発する。これが本ものでないから、
「言うは易く、行^{やす}うは難^{かた}し」

なんて言っている。行^{やす}うときは黙って行えばいい。言うときにははつきりと言えればいい。
その言が直ちにこれも、ある意味において、言そのものが行為でもあるさ。御霊にある言
葉というものは人を動かすからね。

⁶⁸シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。』

⁶⁹又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』

これは素晴らしい言葉です。ペテロはときどき御霊にかられたような言葉を言う。

「われらは信じ、かつ知る」

というこの言い方。「信じかつ知る」と。信^{しん}と知^ちは、一^{いっ}つだということ。霊肉渾然というが、
これは信^{しん}知^ち渾然^{こんぜん}なんです。キリストの言葉は全部、

「霊なり、生命なり」

光なりと。何と言ったつていい。

⁶³活^{いか}すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生

命なり。

こういう言葉は本当に著しい言葉です。こういうのをビリビリ響くように受けとつていな
かつたら、まだ本当は観念だということになる。では、今日はそこまで。

